

第190回くらしの植物苑観察会 2015年1月24日(土)

## -気仙沼尾形家の年中行事と植物-

川村 清志 (国立歴史民俗博物館 民俗研究系准教授)

この観察会では、歴博総合展示第4室とのつながりを考慮しながら、宮城県気仙沼市小々汐地区の尾形家の年中行事で用いられてきた植物を紹介していきます。ここでの事例を手がかりに地域のなかに育まれてきた人と植物との多様な関係に注目したいと考えます。

小々汐地区は市の内湾地区に対して東岸に位置し、世帯数は54戸、人口140名程の集落でした。2011年の東日本大震災によって大きな被害を被った地域の一つです。この地区の世帯の大半は尾形姓で、総本家のオオイ(屋号)を中心に生業や日々の暮らしが営まれてきました。オオイは地域の行事や信仰といった文化的な側面でも、中心的な立場にありました。このオオイの民俗文化の特徴を紹介することを目的として、歴博の総合展示第4室(民俗)の「くらしの場」のコーナーでは、津波で流された尾形家の部分的な復元展示を試みています。

ここでは尾形家の一部を実物大で提示し、そこで営まれている生活の重層性を意識してもらおうとしています。仏壇や神棚、屋根裏や座敷内に貼られた札類などを通して、日々の生活空間が先祖や神霊とともに営まれてきたという、現代の生活ではほとんど忘れ去られた生活の有り様を、感じ取ってもらうことを目指しています。また、このコーナーでは、盆や正月の再現展示をおこなっています。各々の季節になると盆棚を用意したり、年神様やオミダマ様といった飾りを用意したりして、実際の行事の一部を再現しています。

今回は、これらの展示でも看過されやすい、植物利用について紹介していきます。例えば、お盆の行事としてオオイでは盆棚を飾りますが、その様子を4室でも忠実に再現しています。その際に盆棚の色々な供え物にまじって、裏棚にはハスの葉や盆舟が置かれ、また、水をいれた椀には一枝のミソハギが置かれています(写真1)。ハスや盆舟の材料は市場から購入したのですが、お盆の行事には欠かせない



写真1 盆棚のミソハギ (2010年撮影)

植物です。ハスの葉は、お盆の間にご先祖にお供えした料理を入れて、海にかえすためのものでした。マコモとヤナギの枝で作られた盆船も、かつては海に還る精霊船の意味を担っており、近年では墓地で送り火とともに燃やされています。また、ミソハギは、田の溝端などに生えていることが多く、「溝萩」と捉えられることも多いのですが、これは「禊萩」であり日本の他の地域でも盆花として用いられることが多い植物です。オオイでは、供え物を水に濡らしたミソハギで浄めるとされており、文字通り禊の役割を果たしているわけです。とても目立たない展示なのですが、そこには行事に込められた意味が表されているのです。

他方で年末になると正月飾りの展示も行なっています。オオイでは、正月に「松と栗」を、小正月には「笹とコブノキ」、一月末には「漆と杉」を、それぞれ飾ることになりました。4室ではそれらの飾りについても、時期に合わせて行なっています。ちなみに小正月は、「さーさ、喜ぶ」、月末は「嬉しく過ぎた」の語呂合わせで選ばれていると聞き取り資料にはありました。ただし聞き取りだけに頼り、実際の行事に参加しないと、誤ったデータを記録してしまうこともあります。じつはこの「嬉しく過ぎた」で言われるウルシは落葉植物であり、実際に飾られるのは冬でも常緑のキヅタが選ばれることがわかったのです。(写真2)。



写真2「嬉しく過ぎた」のスギとキヅタ

より微細なカテゴリーになりますが、七草の内訳となる植物にも気をつける必要がありました。オオイでは、七日の早朝に当主が、「唐土の鳥が、日本の国へ渡らぬうちに七草たたけ」と唱えながら七草を細かくきざみ、粥を作ることが決まっていました。一般的な春の七草は「スズナ、スズシロ、セリ、ナズナ、ゴギョウ、ハコベラ、ホトケノザ」と言われるものです。しかし、実際に正月に訪れてみるとこれらの植物は、ほとんど芽を出していないのです。オオイでは野の草はセリやナズナくらいで、残りは畑の青物でとにかく七種類の菜を集めて作るとのことでした。これらの資料は、まだ、展示には活かされていませんが、この観察会での話を契機として、今後の展示に組み込んでいきたいと考えています。

次回予告 第191回くらしの植物苑観察会 2015年2月28日(土)

「くらしの中に息づく植物」 天野 誠(千葉県立中央博物館 主任上席研究員)

13:30~15:30(予定) 苑内休憩所集合 申込不要